

---

# 光輝く青空のように

B・R

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光輝く青空のように

### 【Nコード】

N2517D

### 【作者名】

B・R

### 【あらすじ】

「プロローグ」-あなたは大切な人が亡くなったらどうしますか-両親を小さい頃に亡くし、性格が変わってしまった新堂和也。その全てを知る友人の柳川隆介。昔に戻って欲しいと切に願う幼馴染の月島凜。いつも元気な笑顔を振りまき、和也を元気づけようとしている秋奈琴音。和也を思い、空回りをする少女達。そんなことに全く気付かず、冷静に判断し、ストレートに言う和也。それをフオローする柳川隆介。少女達の思いは、通じることができるのだろうか。和也は過去を顧みず、変わるのだろうか…。

## 第一章 すべての始まり（前書き）

初めて投稿する小説です。

未熟者でありますけど、読んでいただくと幸いです。

基本的に主人公である新堂和也が成長していくところを見てほしいです。

お読みになり感想がございましたら、お構いなく書いてください。

## 第一章 すべての始まり

今、目の前に広がっている世界は透き通った青。  
白い雲が一点も無いほどの清々しい空。

地面からは、春が近いのか…草が芽を出し始めている。

あの時の空とは全然違う空が目の前にある。

でも、あれがあつたからこそ今の自分がいる。

そして、隣には俺を変えたくれた人であり俺の大切な人がいる。

これから始まるのは、俺の物語。

新堂和也という一人の男が変わっていく物語である…。

繰り返される日常。

毎日、時間通りに登校し、何も書かれていない真っさらな黒板に教師たちが書いていく文字。

それをひたすら書き写していくだけの日々

「また間違えたか…あの教師。一体何回間違えば気が済むんだ。」  
文句を言っても怒るだけだからスルーだな。

俺の名前は新堂<sup>しんどう</sup>和也<sup>かずや</sup>。

自分で言うのはあれだが…大概の事は出来る普通の男子高校生。

過去にちよつとした出来事があるのだが…そんな気分ではないので  
言わない。

「先生！！その漢字間違えているよー！！教師がそんな漢字間違  
えるなんて恥ずかしいー！！」

「うるさい！柳川！！なら、ココの問いに答えてみるー！！」

注意を受けたのは柳川隆介<sup>やながわりゆうすけ</sup>

俺の古くからの友人であり、小さい頃は、よくバカばっかしていた  
親友だ。

不真面目の部分があるが、やる時はやる男だ。

「問・織田信長や武田信玄など、有名な戦国武将は大概 だった」

これは、またマニアックな問題を出したな。

しかも、先日歴史系のテレビ番組でやっていたのと同じだから…あ  
の教師見ていたな。

「えーと…先生？その問題の答えは分かるのですけど…この場で言  
ってもよろしいのですか？」

確かに。

この答えは男子だけだったら平然に言えるのだが、女子もいると言  
いにくいかもしれない。

でも、周りは問の答えを知っているかのように笑っている。

隆介は先生に許可を求める質問をしたが、実は返答する気は満々の  
様子だ。

「答えはホモですー！！」

平然に言えるのは隆介の良いところなのかもしれない。

言った瞬間、教室内は静まりかえったのは言うまでもない。

その授業で今日の学生の仕事は終わった。

「和也、一緒に帰ろうぜ」

隆介は、さっき答えた問題について全く気にしていない感じた。

「そうだな…帰るとするか」

俺たちは、教室を出て、下駄箱から靴を取り出し、履き替えた。少し歩くと正門の前に、女子がちょこんと立っていた。

「あつ！やつと来た」

この女子は、隆介と同じく俺の古くからの友人の月島凜つきしま りんである。月島とは、ご近所なので小さい頃よく遊んだ仲だ。

「もう学校から出て、帰っちゃったと思ったよ」

「それはねえよ。だって、俺達はゆつくりと教室を出たんだぜ」

「そうだ。待っていると予想したから…」

「それでもね…心配しちゃうだもん」

会話を聞くように、月島は心配性で自分のことより他人を優先してしまうのだ。

「それじゃ帰ろうぜ！！」と隆介が言った瞬間、俺は何かが来る気配を感じた

「和也せんぱい！！待ってください！！」

大きな声を発し、走ってくるのは中学からの後輩であり友人の秋奈<sup>あきな</sup>  
ことね  
琴音である。

琴音は、天真爛漫でいつも元気な女の子で

俺自身、琴音の元気さに助けられたこともある。

「琴音か…どうした？」

「どうしたもこうしたありませんよ！！琴音を忘れないでくださいよ」

そうだった…いつも一緒にいるメンバーなのに忘れてた…。

「あっ！？その顔は忘れた顔だ。先輩ひどいよ…」

「申し訳ない。」

「罰として、奢ってくださいね」

「それじゃ、俺達にも奢ってもらおうかな」

「…ちよつと待て。何でそれで奢らなければならないのだ？」

「後輩でも、人を忘れるのは十分に罪ですよ。先輩。」

「そつだぞ和也。さすがの俺でもそれは…」

「え…と…隆介君。以前、私のことを忘れ…」

月島が何か言おうとしたが、隆介に口を押さえられてしまった。

「…ん？何か言おうとしていたけど…」

「何でもない！何でもない！それじゃ行こうぜ！！」

結局、月島が言おうとしたことは分からず…みんなに奢ることになった。しまった。

俺は奢った為金欠になりコーヒーだけの昼食になってしまった…。

明日から、どうやって過ごしていけばいいのだ…。

コーヒーを飲みながら、窓からいつもと見上げる空を俺は無意識に見ていた。



## 第二章 少女たちの心模様（前書き）

第1章から随分と日にち経ってしまいました…大変申し訳ありません。

それでは、第2章の開幕です。

## 第二章 少女たちの心模様

空を見ながらコーヒーを飲んでいたら…

「この後、どっかに遊びに行かねえ？」

と隆介が話を切り出し…

「みんなで遊べるのがいいな」と琴音が言った。

だが、俺は話が盛り上がる前に

「お金がないから断る」

しかし、月島が「私が出してあげる」

これは月島の良いところでもあり悪いところである。

琴音は「折角だから遊びにいこうよ」と行く気満々だ。

「みんなそういつているだから行こうぜ」と隆介は言うが…

「月島に負担かけるのは可哀想だ。お前達だけで行ってきてくれ」  
俺は拒否の姿勢は崩さない。

俺が行ったとしても、お遊びがつまらなくなってしまっただろう。

しかし…

「4人なので2人組みペアだ。で、どうする？」

結局来てしまった…。

あれからボーリングに行くことになり  
それでも、俺は断り続けてたら

月島は泣き出すうえに琴音は嘆きだすので、断りにくくなってしま  
った。

この時、女の子が流す涙はどれだけの攻撃力があるのだろうか…。

俺が「分かった。行くことにする」と言ったら、急に泣き止んで笑  
みがほころんだ。

俺と一緒に遊んで、どこが楽しいのか。

ジャンケンでペア決めすることになり、結果は…

和也&琴音ペア

隆介&月島ペア

俺とペアとなった琴音は、ルンルン気分で喜んでいる感じ。

一方、隆介とペアになった凜は顔には出していないが…

雰囲気が『ゾクッ』とするようなものが出している…感じがする。

ゲームが開始するが、一投目の俺は見事なガーター…

琴音の場合、女の子なのでガーター防止の壁があったおかげでガー  
ターは避けられた。

隆介は、最初に5本倒したけど、2投目でガーターへ…。

月島は燃えているのか…闘争心丸出し。

普段はゆったりとした雰囲気をかもしだしているのに

この時は、闘争心丸出しでボーリングをしていた。

いつもは見せない月島の豹変に俺は驚嘆した。

ゲーム結果は、隆介&月島ペアが勝利。

俺は、最初にギターに出したのが悪かったのか…

調子が全く上がらなくて、琴音の足を引っ張ってしまった。

琴音には「申し訳ない」と謝った。

「いいですよ。誰にだって調子が悪い時ありますよ」と琴音はフ  
ォローしてくれたが

とても情けない気持ちになり、俺は今すぐにこの場から立ち去りた  
くなった。

「……それじゃ、俺帰る」と言い

「「えっ!？」」と月島と琴音から聞こえた気がしたが、気にせず  
帰った。

「先輩帰っちゃいましたね。やっぱり足を引っ張ったのがショック  
だったのかな」

「和也くんは、責任を人一倍感じやすいから…」

……

場が静まり返った。

「なあ…凜ちゃんに琴音ちゃん…」と隆介が2人に訊ねた。

「2人とも、和也のことが好きなんだろう？」と唐突に聞いた。

「凜ちゃんは昔からそうだったし…琴音ちゃんは、和也に対しての  
態度を見てたら分かったから」

隆介の発言は止まらない。

「いつまで2人ともイジイジしているんだ？」

「そんなこと分かっているわよ…私は小さい頃まで明るかった和也くんに戻って欲しい…その頃の和也くんが好き。今の性格の和也くんも好き。」

に対して琴音は…

「あたしも先輩が好き。一緒に過ごして元気づけていきたいの。あたしが先輩の天使になりたい。」

「2人が和也に対しての気持ちは分かった。だけど、和也は鈍感だから積極的にアプローチをしなきゃいけないぜ。2人とも。」

「「そんなこと分かっているわ（よ）！！」」

「はいはい。それじゃ、おいらは帰るよ」

「あたし月島先輩に負けないから！！」

「私も琴音ちゃんに負けない！！ぜったいたい和也くんの心を射止めてみせるわ！！」

今日、この日から凜と琴音の勝負が始まる…。

### 第三章 変わり始めた世界（前書き）

新年明けましておめでとうございます。

去年の暮れから書き始めた新年まで延びてしまいました。

それでは、第三章の開幕です!!

### 第三章 変わり始めた世界

「…う…ん？もう、朝か…」

窓から朝の眩しい日差しが差し込んできた。

また、いつもの日常が始まると思うとやってられない。

それでも、俺は学校に行き続ける。

あいつらがいれば、単なる日常が面白く感じられるはずだから。

いつもの通学路歩いていると…

「あ…和也くんおはよう」

いきなり月島が路地から現れて驚いた。

「月島…。なぜここにいるんだ？」

しかも、なぜいきなり出てくるのだ？

「えっ？え…っと…いつも一人で登校しているよね？一人だと寂しいと思うから今日から一緒に登校しようと思って…」

確かに…俺は、いつも一人で登校している。

その事で俺は寂しいとか悲しい気持ちにはならない。

両親が死んで…ほぼ一人で生きてきたからそういう気持ちにならない。

でも、まあ一人で登校するよりもいいよな。

「俺は別に構わない。あとは、月島の判断だ」

そういうと付いて来たから一緒に登校することになった。

月島は俺に対して話してかけてきているが、朝の俺は貧血気味。

だから頭が上手く回らないから返答が安易になるが、月島は気にしていないようだ。

学校に着くと隆介が教室にいた。

いや、言葉に語弊があった。

いたというより机に突っ伏して寝ている。

学校に来て寝ているのか。

眠くなる気持ちは分かるが…やはりここは起こすべきだろう。

俺は隆介の脳天にチョップを喰らわそうとしたら…

がばッ!!

いきなり起きた…。

「ふあああああゝ…あ、おはよう。今日は二人で登校してきたのか？」

「あ…ああ。そうだが…それがどうした？」

「此間、言ったことを早速実行か…いつひひひひひ」

「実行……？一体何を実行？」



「おいらじゃねえよ。」

「じゃ…誰が…？」

「さあ…誰だろうね…」

隆介は薄気味笑いをしながら、誰かとは教えてくれなかった。薄気味笑いしている時、月島が赤くなっていたが、なぜ…？単なる日常でもいつもの日常ではない。また違う日常が起き始めているだろうか…。

午前の下らない授業が終わりお昼になった。

いつもの俺は何も食べない…稀に100円で済ます事がある。だが、今日は何も食べない。

そう決めて、何も考えずにボーツと空を見ようとしたら……

「和也くん？」

月島が話しかけてきて

「もしかして今日の昼ごはん食べないの？」

「ああ…。食べなくても大丈夫だから。」

「でも、それは体に良くないよ。…だから私持って来たよ」

「…持ってきた？…何を？」

「お弁当…だよ」

月島は俺なんか為に弁当を持ってきてくれたそうだと。それは、嬉しいことだが迷惑はかかっていないのだろうか？それを言おうとしたが…

「私は、好きで作ってきたから迷惑はかかっていないよ」と言われてしまった。付き合いが長いから分かるのか。

「ただ、俺は食べるわけにはいかない。

でも、食べないと…いや…しかし…そうだ！

「おい。隆介。」

俺は売店で買ってきてパンをモグモグ食べている隆介を呼んだ。

「何だ？」

「ここにある弁当食べていいぞ。」

「えっ?! いいのか？」

「ああ。いいぞ。」

「それではありがたくいただきます!!」

「あっ?!…っ!」

「どうした？月島？」

「うっん。何でもないよ…。」

月島は何か言おうとしたら隆介が食べ始めた時に口ずさんでしまっ

た。

隆介が食べ始めた後、月島が隆介を鋭い目付きで見ている。

食べ終わった後、月島が隆介を教室の外に呼び出して出て行った。

昼休みの終了チャイムが鳴る寸前に2人とも帰ってきたが…

隆介は恐ろしいものでも見たのだろうか…顔色が優れない。

一方の月島は、何もなかったのような平然とした顔つきだった。

隆介に一体何があったのか…あまり考えたくない…。

午後の授業も「光陰矢の如し」ように過ぎ去っていた。  
放課後になり、帰ろうとしたら…

「バンッ!!」

「せんぱい!!一緒に帰りましょう!!」

後輩の琴音が勢いよくドア開けた為「ミシッ!」と音がしたが…触れないでおこう。

「琴音…。もつと静かに教室のドアを開けて入って来い。」

と言うのがあの琴音だ。言っても無駄だと思った。

実は、昔に…いや言いたくない。機会があればいつか話そう。

「そんなこと気にしていたらハゲてしまいますよ?」

「俺はそんなに年をとっていない。それに勝手にハゲると言っな。」

「そんな冗談をおいというて…一緒に帰りましょうよ。」

冗談なのか？これは言葉の暴力ではないのか？

まあ、俺にはこの後用事はないし琴音が一緒に帰ろうと言っているから

「分かった。帰ろう。」

実は了承した理由は、もう一つある…。琴音は断ると駄々をこねるからだ。

そのような行為を教室内でやられると……。

風が吹く。

時を進めようとして吹くのか。それとも勇気を出す風もあるのか。

俺の傍らには琴音がいる。

教室では元気だったのに沈黙してしている。

それにどうも様子がおかしい…。

「琴音…。どうかかしたのか？さっきから何かおかしいぞ」と尋ねた。

「……………」。

琴音は何も発しない…聞こえていないのだろうか。

いや、俺が琴音の声が聞こえないのだろうか。

「…先輩。」

「何だ。琴音。」

「先輩って…」

「……。」

「先輩には…好きな女の子は…いますか…？」

それからどれだけ時が進んだろうか…

俺が感じるには長く感じたが、時の感じ方は人それぞれ。  
時が進まないで、俺はすぐに答えていたと思う

「いない。」

「どうしてですか？」

琴音の顔はいつもの明るい笑顔ではなく、真剣な目と顔つきだった。

「理由が必要か？」

「何かあるのなら、無理には答えなくても…」

「理由はある。だから言いたくないから言わない。」

「分かりました…。」

聞きたいのだろうか。顔が悔やんでいそうな表情だ。  
でも、「あの事」は自分でも言いたくない。

その後は、琴音は何も言わず、途中の道で別れた。  
自分の家までは一人の帰路になった。

「ふう…」

俺は手に持っていた通学用鞆をベッドに放り投げ俺も飛び込んだ。

「好きな女の子…。」

琴音が言っただのが頭から離れない。

「ヴィー…ヴィー…ヴィー…」

携帯のバイブリータ音が鳴った。

そういえば、マナーモードのままだったな…。

電話で隆介からだ。

「ピッ！！　もしもし？俺だ」

「よう、和也。っとその前にいきなりオレオレ詐欺みたいなことから言っなよ」

「それじゃ何と云えばいいのだ。」

「おい。真に受けるなよ！そんなことはどうでもいいんだよ」

「何だ。それで用件は？」

「お前ってさ…女の子を好きになったことがあるか？」

ドクンッ！！

隆介が言ったことに俺は動揺してしまった。

「いや！ないが…」

上ずった声を出してしまい、隆介に感ずられてしまいそうだ。

「うん？今、上ずった声が聞こえたが…まあいーや。」

どうやら大丈夫のようだ。

「俺から言うのもあれなんだが、少しは凜ちゃんと琴音ちゃんのことを考えてあげろよ」

隆介は一体何を言っているのだ。月島と琴音について考える？

「なぜ月島と琴音についてなんだ？」

「やっぱり…お前って奴は…!!」

なんだ？怒っているのか？怒らせそうなことは言っていないと思うが…

「…まあ、本人が気づいていないのは仕方ない」  
なんか納得している感じた。

「じゃ、ストレートに言うからな。凜ちゃんと琴音ちゃんは…」  
月島と琴音は…

「お前…つまり新堂和也が2人とも好きなんだよ」  
…はあ!？」

「いいか!？2人ともお前のことが好きなんだ!!それを考えろ！」

「…えっ…えっ…」

「それをどうするかはお前次第だ。それじゃあな。」

「プー…プー…プー…」

電話は一方的に切られた。

2人が俺のことが好きということは初めて知った。

俺はその気持ちに応えられることが出来るのか…。

無理だ。俺はそういうことは考えられないのだ。

親父とお袋が死んでから、俺は誰も不幸させてはならないと決めたからだ。

俺は真つ暗な空みたいに明るくない。

でも、逆にその気持ちに応えてあげないのは彼女達の不幸に入るのだろうか…。

分からない…。どの選択が良いのだろうか…。

いや…どの選択も俺が導き出す答えに逃げているのではないだろうか。

俺は、考え続けていたら急に意識が途絶え始め…眠りの世界へ…入っていった。



### 第三章 変わり始めた世界（後書き）

どうでしたか？何かありましたらお願いします。

次話を書こうとしているのですが…私の都合が合わなくて中々書く時間が取れません。

出来れば1月の間に投稿しようと思っています。

1月中には投稿が出来ませんでした。

現在第4章の製作に取り掛かっています。

完成予定は私の努力次第です。

もう少しお待ちいただきます。

お楽しみ方々には大変申し訳ございません。

#### 第四章 心の波紋（前編）（前書き）

お待たせしました。

最後の話から2ヶ月経ちましたけど次話投稿です。

と言っても前編です（汗

それでは、前編のお話を…どうぞ…。

## 第四章 心の波紋（前編）

俺が導き出す答えの先に何があるのだろうか？

…

…

考えていたら頭がおかしくなってきた。

いつかは真剣に考えなくてはいけない事だが…考えるのをよそつ。

俺は、あの出来事から心に決めた事がある。

「誰も悲しませたくない」

だから、今出した答えが最良と考えられない。

時間をかけて、少しずつ判断していくことにしよう。

…

…

…

「ピッピッ！ ピッピッ！ピッピッ！」

新たな1日を始めさせる電子音が脳内に響く。

「カチッ」

「…眠い」

一体いつまで起きていたのだろうか？

いや、何回寝て起きるのを繰り返したのだろうか？

2度寝は気持ちいいが…何度もやると眠気が増す気がする。

今日は、土曜日だ。

次の日が休みだから昨日言われたことを考えていたのだろう。  
とりあえず、起きなければならない。

1階の居間に行き、冷蔵庫から牛乳を取り出しコップに注ぎ…  
前もって買っておいたパンと一緒に食べる。

「冷蔵庫の中ほとんど無かったな…」

冷蔵庫の中は食材と呼べる食材が無かった。

「仕方ない…午後から買いに行くか…」

昼は食べなくてもいいが…さすがに朝と夜は食べないとな。

「午後になるまで報道ニュース番組とか見るか…。」

ボーっとテレビを見ながら時間を過ごしてゆく。

あっという間に昼になり、テレビからはお昼を知らせる映像が流れた。

「さて…そろそろ買いに行くか…」

昼ごはんは要らないから夕飯分と数日分の食料だけだな。

「ピンポン」

来訪者を知らせるチャイムが響いた。

「一体誰が来たんだ？」

俺は玄関に行き、ドア越しからスコープで人物を見た。

「月島！？ なぜ？ いや近所だから何かの連絡か？」

そう考えている間に

「和也くん？ 私です。月島凜です。」

俺は、とりあえずドアを開いた。

「こんにちは。和也くん。」

「…ああ。こんにちは。で、何か用？」

「えっ？！ いや…その…」

予想をしていなかった言葉に戸惑っているのか？

それに、手には野菜やらがビニール袋から飛び出していたのが見えた。

「手に持っている物は何だ？」

「あつ！？ これ！？ 実はご飯を作りに来たんだ。」

昔…いや数年前に月島が俺の家に来てご飯を作ろうとした事があった。

その時は、甘えさせてもらい作ってもらったが…

それから毎日来るようになってしまい、これ以上は月島に迷惑をか

けられないと判断し

俺は月島を家に入れるのを止め、ご飯を作りに来るのを拒んだ。  
しばらくの間、月島は諦めずに来ていたが、いつかは忘れたが来なくなつた。

家に来るのはそれ以来か…。

「…以前にも言ったが、それは拒んだはずだ。」

「うん…。でも、心配になつたから…。」

「他人の心配するより自分のほうが優先じゃないだろうか？」

「それは、そうだけど…。」

「理解しているはず。もう、俺は昔の俺ではないことを…。」

「……………」

「それじゃ…。」

俺はドアを引き、俺の視界から月島は見えなくなった。

月島は何も言わずに帰つたと思う…だが…。

それから2時間ぐらい経ち、そろそろ食料を買いに行かなければなくなつた。

「さて、そろそろ行くか…。」

身支度は、既に終わっているから財布と鍵を持ち家を出るだけ。  
ドアノブに手をかけ、ドアを開こうとしたら

「ッ！？開かない？」

玄関のドアは押す扉だから引くことで開いたり、スライドする扉ではない。

ましてやシャッターみたいな扉でもない。

どういう状況か分からなくなった。

状況確認の為、靴を持って1階の縁側から出ることにした。

俺の目の前には信じられない状況が起きていた。

ドアを開くのを邪魔したのは、月島だった…。

「……………」

俺は驚くというより厭きたのだった。

ドアに寄りかかり蹲うすくまって寝ていた。

「とにかく起こさなければ…」

体を揺すってみたらすぐに起き

「はっ！？私…寝ていた？」

全く、人の玄関先で寝るなんてどういう考えしているやら…

と言いたかったが、そこまで言ったら泣くかもしれないから伏せておこう。

「ああ。寝ていた。」

顔には泣いた跡みたいなものがあり、目も潤んでいた感じもした。

「一体、どういふつもりだ。俺は帰れと言ったはずだ」

蹲り寝ていた理由を問詰めるように事を無意識に言っていた。

「……………」

月島は何も言わなかった。

日も暮れ始めたのか、気温が低くなり冷えてきた。

もし、このまま玄関先に蹲り、夜もずっといたら風邪をひいてしま  
うかもしれない。

今の月島ならやりかねない事だな…。

「はあ…とりあえず家の中に入れ。」

この俺が妥協するなんて…どうしたんだ？

一方の月島は素直に家へ入っていった。

「ホットミルクとコーヒーどっちがいい？」

「ミルクで…」

俺は、月島をリビングの椅子に座らせて

冷えた体を暖める為にミルクをレンジで温めていた。

ちなみに俺はコーヒーを作っていた。しかもレンジで…。

「ほら、ミルクだ」

「ありがとう。」

俺は月島がミルクを飲んで落ち着かせてから  
話を聞くのが最良だと判断した。問題はそれからだ。



俺は月島が飲み終わるまで、  
コーヒーの波紋の中に映りだされる自  
分を見ていた。

#### 第四章 心の波紋（前編）（後書き）

どうでしたでしょうか？

いきなりですが…

この先の話を書いた紙が紛失したので  
設計図が真っ白状態になっていますorz

でも、幸いに暫定プランがケータイに残っていたので  
それを基にして新しく書いていきます。

それでは、後編で会いましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2517d/>

---

光輝く青空のように

2010年10月15日22時57分発行